

南アフリカ共和国の教育事情及び生活習慣・文化

前ヨハネスブルグ日本人学校 校長

北海道名寄市立風連中学校 校長 山本昇一

キーワード：教育制度，南アフリカ，親指ピアノ，マディバ，TIA

1. はじめに

南アフリカ共和国は1994年にアパルトヘイト政策から今日の民族融和主義政策への大転換を図った。それに伴い教育政策も大きく変わった。1948年に国民党が勢力を持つようになりアパルトヘイト政策が敷かれるようになった。1966年にアパルトヘイトを推進していたフェルワート大統領が暗殺された。その後1976年には、若者有志が黒人の学校で強制されていたアフリカーンス語の教育に対して反対し勝利を得た。1983年、有色人とインド人への分離選挙が変更されるとほめかされた。1986年、黒人に対する身分証の携行義務が廃止。1990年には民主化を訴える中心人物の一人だったマンデラ氏が27年間の投獄生活から解放され、1994年の全人種総選挙を迎え民主主義国家の誕生となった。

南アフリカ共和国の教育施策について、南ア政府発行の南ア年鑑1986年版及び2006年版並びにホームページ等を基に簡単にまとめたことを以下に述べる。

2. アパルトヘイト時代の教育

(1) 白人教育の変遷

白人教育は、教育省の前身の教育連盟から教育分野（技術、家政、商科、工科、聾啞盲身障等）をすべて取り扱う国家教育省へと変わった。また、高等教育における教員研修も総合大学や技術大学で実施するようになった。

1955年の職業教育令によって、教育、芸術文化、特殊教育、職業、商業、経済など全ての分野にまたがる教育を整理統合して扱う教育省が設置された。各県の教育庁においては、小学校、中学校、高等学校、農業学校、精神遅滞障害児の学校の設置及び、それに携わる教員の養成を行った。

1964年に教育調査委員会が教育制度のシステムに疑問を抱く結果を出し改善を促すこととなった。1972年に学制が4つの段階に再編され、年少組と年長組の基礎教育、年少組と年長組の中等教育がそれぞれ3年ずつ、合計12年間の教育をするように学制が整えられた。

(2) 黒人教育の変遷

1986年当時、南部アフリカには18の教育局があった。そのうちの5つの教育局は白人教育に充てられ、黒人教育には11の局が当たっていた。6つの州及び4つの独立した共和自治区の10の地域ではそれぞれ地域内の教育局が統括しており、これらの教育及び教員研修を担う教育局は、南ア政府の直轄のもとに、この地域の全ての黒人教育をつかさどっていた。南アにおける早期の黒人教育の歴史は、宗教的努力の一助によっていた。つまり、教会主宰の黒人教育はそれぞれ独自の教科書と教育計画を持ち、基礎教育の水準での内容を指導していた。

1981年の教育改革で自由教育と義務教育とが南アフリカ全土に施行され、年々各地に広がりを見せ、保護者の合意と協力のもとにこの義務教育制度が定着していった。これに先駆け1979年に「教育と研修に関する法令」が施行され、①義務教育について、②フリースクールを含む自由教育について、③母国語の学習（第2学年～入学4年目～）～保護者の要望がある場合を除き、アフリカーンスと英語の公用語を履修、学校保健（政府の国家保健人口省の管轄下）の内容が示された。これにより、この法令に基づいた黒人教員の待遇は、黒人以外の教員の待遇と同一であることを認めるものとなった。1980年の5月5日に当時のボータ大臣（後の大統領）は、「どの人種族の人々も教育の目指すところは同じであるが、強調すべきは黒人に関する歴史的な事は一晩では解決でき

ない。政府も私も、南アフリカの経済政策の見地からも出来るだけ早く、この教育の到達点を他の人種と同様に策定する準備ができています。」と述べている。1984年、新しい国家教育省が誕生し一般教育の国家指針に関する法令が施行された。これにより、全国民に対する教育財政の予算化、職員の雇用条件と給与、教員の専門職登録、教育課程と考査、資格付与等について、制度化された。この制度の中で最も重要な点は、「平等な目的を達成するための教育、平等な水準の教育、つまり、人種、民族、色、思想信条、性別に関係なく実現するよう、この共和国に住む全ての人が努力すべし。」ということであると記されている。

上述のように1986年代からの約10年間、アパルトヘイト政策下の隔離された教育が、1994年に歴史的な大変換を遂げた。そして、政府の機構改革は勿論のこと、教育制度を整えることは「虹の国」の建設に向けて欠かせない大切な要素として重要な位置を占めることとなった。それまでの不平等な教育が、制度の整理統合に努め国として統一された教育計画を推進すべきであり、生涯学習の枠組みを民主国家としての南アフリカ共和国での最初の教育計画の中に盛り込んだのは大変画期的なことであった。

3. アパルトヘイト後から現在までの教育

1996年に新憲法が施行され翌1997年に国の教育計画の骨子が作られ、教育審議会において基礎教育部門、中等教育部門、高等教育部門の3つの部門から構成された学習指導要領の原案が提示された。その後2000年に教育課程が更に検討され、改訂学習指導要領による教育課程が2005年までを見通した計画として、教育関係閣僚の協議会において提唱された。

この5年間で様々な検討が加えられて改訂版学校教育計画として発表され、一般教育指導と研修資格の制度がこの中に盛り込まれる等の改善が行われた。義務教育に対する一般教育指導と研修資格証明は、学校教育を通じて学習効果と達成度が一定の水準に達する為に必要な資格として位置づけられた。

現在の教育課程は8つの学習分野から構成されており、各分野での知識理解、技能、応用力そして、学習分野相互の横断的な学習能力を身につけることとしている。現在の改訂学習指導要領では、学習分野を言語、数学、自然科学、技術、社会科学、芸術文化、生活指導、家政科学としている。人権、健康な環境そして社会的正義観等の間の相互関連も、それぞれの学習分野を通じて学習するよう示されている。

(1) 学習成果と評価基準

基礎段階（R～3学年）では、読み書き、数概念、生活技能の三つの学習計画で指導する。中等段階（4学年～6学年）では、言語と算数は独立した学習計画を立て、それぞれの学習領域で示された成果が効果的に理解され身につけているかを確認する。高等段階（7学年～9学年）では、8つの領域それぞれに示された要領に基づいた学習計画を履修する。

教師には、学習計画を推進する責任がある。教育省は、学習計画を推進するための方策のガイドラインを示している。各州は、様々な事柄に対応する場合に、さらなるガイドラインを用意するとしている。教員教育計画は、教師の能力育成を図り、学校をチームとして管理し、各部門は全職員の成長を支援して、教育計画の実践、管理、支援及び発展を図ることとしている。

(2) 時数等と単位時間

授業の時間配当は、通常の授業日は7時間である。国の教育指針に関する規則により、正規の指導時間は週35時間と規定されている。各発達段階に応じて、授業時間が設定されており、1単位時間は30分である。基礎段階のR～2学年は週22時間、第3学年は週25時間。中等段階の第4学年～6学年は週26時間、第7学年は週26時間、高等段階の第8・9学年は27時間で、何れも単位時間は30分である。低学年の履修計画では、読み書き40%、数概念35%、生活技能25%の割合で計画されている。中・高学年の時数配分は言語25%、算数・数学18%、自然科学13%、社会科学12%、技術8%、家政科学8%、生活8%、芸術文化8%の割合で計画されている。

(3) 言語指導と識字率

改訂学習指導要領では、概要の解説後にそれぞれ履修する分野・領域について取り扱う内容と評価についての解説があり、政府のホームページ、教育省のホームページに詳しくアップロードされている。各分野での特徴的なことは、言語領域では、日本は日本語と第2外国語等の扱いしかないが、多民族国家の南アフリカ共和国では11の公用語の履修も含まれている。11の言語とは、セベディ語、ソト語、ツワナ語、スワティ語、ツイヴェンダ語、ツォンガ語、アフリカーンス語、英語、ンデレベ語、コサ語そしてズールー語である。これらの言語の中から母語（それぞれの民族の言語）と英語、アフリカーンス語の3つの言語を必修としている。

1996年を境に南アフリカ共和国の進む方向がコペルニクス的転回を図ったことは、アフリカ諸国の中でもこれまでに類を見ない国家体制の転換である。国家の将来を大きく左右する教育政策は、その国の目指す国家像に反映される大変重要な部分である。多民族を抱えるこの国は、言語履修が大きな課題であると同時に、共通語を介して国の理念を浸透させることは大変重要であり、教育の効果を期待する部分でもある。識字率が89%と言われており、都市部においては非常に高い水準の教育を受けられるが、地方では必ずしもそうではなく基礎基本の段階の教育すらままならない集落が多い。2008年の就学率調査で初等教育で105%、中等教育で95%となっているが、学校に通っていないものも7%いるということからも裏付けられる。

(4) 新教育制度後の成果と教育の動向

憲法や改訂学習指導要領でも触れているが、マンデラ（国民は愛情を込めて「マディバ」の愛称で呼んでいる）大統領が演説の中で唱えた「虹の国」の建設に向けて、まさにこれからがその効果が表れてくる時代である。あれから17年が経過し、当時小学生だった子どもたちが民主国家を築くための義務教育を受けて、成人する年代に入った。労働力人口（15歳以上）が1700万人に達し、労働力率（人口総数に対する労働力人口の割合）は53.9%（2008年）である。10年後の2020年の人口予測では人口総数は5300万人に推移し、15歳以上の占める人口（労働力人口）比率は約60%になると予想される。

また、教員になるための専門的な訓練を受けている教師は初等教育においては79%（2006年）というデータがある。西ケープ州の教育局が中心となって「キヤ プロジェクト」という研修制度を推進している。全国的な教育開発プロジェクトとして都市部の学校に州をまたいで参加を呼び掛け、教員の資質向上と学校教育のレベルアップを目的として広がりを見せている。日本と同様に「授業の改善」と教材教具の開発を軸として推進されているものである。

（キヤプロジェクトの「キヤ」とは、ズールー語で「光をともし」「啓発する」「明らかにする」等の意味である）

4. 人々の生活とその様子

(1) 親指ピアノコンサート

南アフリカ共和国は固有の伝統音楽などはあまり多くなく、近隣諸国から入って来たものがほとんどである。毎週日曜日にローズバンク・ショッピングモールの駐車場を会場にフリーマーケットが開催されている。そこには、ジンバブウェ、ボツワナ、ケニヤ、ナイジェリア、ナミビア、コンゴ、アンゴラなどから南アに来ている人々が、黒人も白人も入り乱れて様々な、しかもおびただしい種類の商品が所狭しと並ぶ。「カリンバ」なる民族楽器が「ンビラ」や「サム・ハーブ」という名前でも売られている。ジンバブウェが発祥の楽器である。

偶然、5月に日本大使館から「親指ピアノ」の演奏者が南アに来るので日本人学校でもどうかとお声かけを頂き、急遽学校で「親指ピアノコンサート」を開催した。実は「親指ピアノ」とは、前述のカリンバやンビラのことだ。電子楽器ではない。材料は、壊れた机などを20cm×10cmくらいにして本体とする。道端の落ちていた太い針金を拾って加工し、キーにする。後は本体に釘や針金でうまく固定して、親指ではじいて音を出す。基本的には共鳴部がないので余り大きな音は出ない。ココナッツの実を半分に分けて中身を食った後に乾燥させ、その上に取

り付けたものもある。

演奏者は、「サカキ・マンゴーとリンバ・トレイン・サウンド・システム」というグループである。その楽器を研究しながら世界中を回っている人がいるとは想定外だったので、私は驚愕と同時に千歳一隅のチャンスに大変嬉しくなった。この楽器の研究のためアフリカ諸国を旅してまわり、研究の成果を世界に発信する人が日本人学校を訪れ、しかも、実は日本人であった。サカキ・マンゴー氏がその人である。彼が率いる彼らについては、実は公式ホームページを開いており、そこに詳しい。(アドレスは<http://sakakimango.com/>)

(2) 治 安

南アフリカ共和国は、犯罪が世界で一番多発している国である。2010年にサッカーワールドカップの開催国となった時にも、安全事情が真っ先に報道された。特に日本のメディアが「そんな危険な国で生活している邦人はどうしているのか。」という取材が殺到した。サッカーよりもそちらが日本国民の興味を引くかのようだった。治安の善し悪しが指摘される背景には、政治家や国家警察幹部の不祥事も、ニュースでは報道されている。しかし、主な原因は、経済格差と貧富の差、外国人不法労働者の増加によるものである。東洋人は良く目立つので外を気楽に歩くと、窃盗やひったくりの的となりやすい。従って、公道を歩くことはなく、移動は自家用車でドアツードアである。車での移動でも、助手席の窓ガラスを割って、目の前から助手席のバッグや荷物が盗まれることがよくある。これが“クラブ&スマッシュ”だ。

ヨハネスブルグ市はメトロポリタンとして南アフリカ共和国内のどの都市よりも、近代化が進んでいる。3つある首都(政治機能を分立し、プレトリアは行政府、ブルームフォンテンは司法院、ケープタウンは立法府)のどの都市よりも人口が多く、商業施設も充実し近代的な建築物も多く見られる。世界中の各国首都と同様である。残念なことに、CBD(Central Business District)は、かつての一大ビジネス街の面影はなく、不法移民による建物の不法占拠により都市機能が崩壊し、社会経済の悪循環により犯罪の巣窟となって久しい。現在は、企業の事務所や商業の中心は郊外に分散している。

(3) 結 婚

昔日本では、結婚の条件は、家付き、カー付き云々と言われた時代があったが、こちらのズルー族出身者は、牛を11頭花嫁の家に渡さなければ結婚できないという。それだけのお金が用意できるまでは、一緒に住んでいて子どもまでいても結婚はできない。他の部族(ソト族、コサ族、ツォンガ族、ンデベレ族など)も似たような風習があり、やはり牛何頭と言う取り決めが習慣として残っているようである。警備員で来ていたターボさんも、妻や子どもがいるが牛がそろわないので結婚できないと言っていた。

大統領のジェイコブ・ズマ氏は奥さんが7人いる。スクールバス運転手のケイファス氏は奥さんが3人いたらしい。ズルーの人たちは今でも一夫多妻の生活をしている。

(4) 衛 生

South West Township(頭文字をとって、SoWeTo = ソウェト)という旧黒人居留区では、病気にかかった時には民間療法がある。市場では〇〇に効く薬草や根、動物の肝などがある。勿論、病院や処方薬局もあるが、呪術師に占ってもらい民間薬を使用している場合も多い。それよりも深刻な問題はHIV感染や薬物中毒に関する問題が多いと聞く。毎日のようにテレビの政府広報で、HIV撲滅や血液検査、コンドーム使用の推進を放送している。マラリア、 Dengue熱、狂犬病、クリミア・コンゴ出血熱等も心配である。貧困層にとって現実には厳しいようである。

(5) 挨拶

この国の人々は全く見ず知らずの人でも、お互いに挨拶を交わす。同じクラスターの住人であれば、手を振って挨拶を交わすのが普通である。一般の住民ばかりではない。店に買い物に行ったらレジでお金を払う時にも、係の

人が必ず挨拶をして始まる。この習慣は国内どこへ行っても同じである。駐車場で警備をしている人々も必ず挨拶をする。この挨拶には、長年の慣習が関わっているのだろうか。「自分は敵ではないぞ」「仲間だぞ」と強調しなければ、襲撃されるという終了時代の名残がある。だから、見ず知らずの初対面が大事な挨拶になり、ちゃんとしなければならない。通常は握手を同時にするが、ズルー族や他の種族の人たちの握手は、3ステップの握手である。①普通に握手のあと②親指を中心に掌を合わせるように握り③また普通の握手に戻り、終了。意味は、①の動作がHello、②How are you? ③Fine, and you? ということである。但し、欧州系の人々は普通の握手であったり、親しい人とはハグで挨拶をしている。日本人はあくまでも深々と頭を下げ礼をするのが、挨拶である。

(6) レジャー

この大都会の郊外には、いろいろなレジャー施設がある。私が誘っていただいた釣り堀。車で施設の中に入って草むらに車を止める。木陰に適した木々の下にはベンチやテーブルがある。そのすぐ横にバーベキュー用のかまどが置いてあり、ピクニックで利用している。入場料は五百円。釣り竿と餌セットで三百円ほど。かまどは無料。南アフリカでは、バーベキューのことを「ブライイ」という。夫婦で、家族で、隣近所で、親せきで、職場でも、仲間でも何かあるたびにこのブライイをする。北海道でジンギスカンを囲むのと同じ感覚である。

道路が良く整備されていて、舗装道路が国内の主要都市間をくまなく結んでいる。飛行機で近くの町まで飛び、空港でレンタカーに乗り換えて、キャンプ場へ行き楽しむことが簡単にできる。シャレー（コテージ）を利用する場合も、ブライイ用コンロが必ずある。牛、羊、豚、鳥、ブルボス（南ア特産ソーセージ）、魚介類など豊富な食材がたくさん手に入り、ブライイ用の薪、炭、着火剤、火ばさみなどあらゆる便利グッズが売られている。ワインも南アフリカの楽しみ方の一つである。どの種のブドウから作られたかによって、名前が付けられている。南ア特産の「Pinotage」は、ここでしか作られていないものである。

5. おわりに

2010年はサッカーワールドカップ大会が開催され、また、南アフリカ共和国と日本との国交百周年記念に当たる年でもあった。翌年はCOP 17（Conference of the Parties; COP）がダーバンで開催され、世界の自動車ショーもヨハネスブルグで開催され国際社会に大きなアピールをしてきた。そのような都市に三年間を過ごして貴重な体験を得た。

高速道路網が充実し、どこへ行くにも車が飛行機である。ヨハネスブルグ市内の高速道路は無料で通行できたが有料案が出された途端に、労組であるコサツが抵抗運動を展開し集会とデモを繰り返した。鉱山労働者も賃金をめぐって罷業を繰り返し、発砲事件が起き、現在も最高裁で争っている。警察官や教員も生活闘争を繰り広げ不満を訴えるが、現政権はその対応に苦慮している。

ヨハネスブルグはビルが林立し舗装道路が整備された都市であるが郊外には円形の草葺屋根の家が点在し家畜や畑で暮らしている。今でも頭に荷物を載せて何キロも歩いている人の姿を見かける。近郊にあるタウンシップ（旧黒人居留区）では、ライフラインの整備が不十分である。マディバは虹の国を建国しようと努め、95歳の今日も国民から支持されている。しかし、最近では体調があまり良くないらしい。国民が皆心配している。

様々な側面から、かつての時代の名残が垣間見えるのであるが、政権が代わり民主国家の歩みを始めて二十年弱。物価が毎年5～7%ずつ上昇し、掲げている目標にはなかなか近づかない事を国民は知っている。犯罪もなかなか減少せず、それに対する国の対応にも問題を抱えている。トム・クルーズが映画の中で使ったセリフ「This is Africa」。略してTIA。遅々として改善が進まない矛盾を皮肉って言った言葉である。生活の端々にTIAを実感する場面があったが、小職がアフリカではないと言われる大都市ヨハネスブルグで暮らすことができ、得難い貴重な経験をする機会を与えていただいたことに、心から感謝を申し上げ、更に精進を重ねて参りたいと考える。